

課題：「アイデンティティの越境—アジア主義」

報告題名：1930—40年代の日中におけるアジア観とアイデンティティ

—『新亜細亜』『新東方』に反射するアジア観—

川島 真（東京大学大学院総合文化研究科）

kawashima@waka.c.u-tokyo.ac.jp

1. 「アジアの越境」というテーマと「アイデンティティの越境」という課題

農産物貿易、国境を越える犯罪、人権問題という諸問題とともに、「アイデンティティの越境」という課題とともに、アジア主義という個別テーマが与えられた。報告者は、既発表の論文である「関係緊密化と対立の原型—日清戦争後から二十一カ条要求まで」（劉傑・三谷博・楊大慶編著『国境を越える歴史認識』東京大学出版会、2006年所収、28—50頁）、あるいは「歴史対話と史料研究」（同上書、347—366頁）において、東アジアにおけるアイデンティティの越境について述べたことがある。それは、（これは特に外交の分野における議論をもとにしたもので思想史研究的な検討を踏まえているわけではないが）日本が条約改正の過程で自らを（当時の国際社会における）文明国家であると主張したが、その際に西洋に対するキャッチアップだけでなく、中国をネガティブな鏡として、その非文明国性を否定してきた。台湾出兵、琉球問題そのほかにおける日本外交における対外宣伝がそれを物語っている。しかし、他方で、中国が自らの文明国性を強調するようになる20世紀初頭になると、日本が列強の中で突出した侵略者と看做されたこともあり、日本の二十一カ条や第一次大戦における山東出兵などの行為を「野蛮」とし、自らは国際公法を遵守する文明国だとする論調が目立った。日中相互は、相手を否定的な鏡とすることで、自らを文明国、ひいては富国、強国と想定しようとしていた。これは歴史認識、アイデンティティに深く関わり、戦後にも継続した面があると思われる。

2. アイデンティティの形成／相互反射／相互影響

他方、中国における「中国」としてのアイデンティティ形成については、1900年代が注目されている。拒俄運動、反米運動、辰丸事件などに伴う「中国」「中国人」という意識、アイデンティティの形成については、以下の史料が参考になる（梁啓超「中国史叙論」）。

吾人がもっとも漸愧にたえないのは、わが国には国名がないということである。漢人、唐人などは王朝名にすぎないし、外国人のいう支那などは、われわれが自ら名づけた名ではない。王朝名でわが歴史を呼ぶのは国民を重んずるという趣旨に反する。支那などの名でわが歴史を呼ぶのは、名は主人に従うという公理に反する。中国・中華などの名には確かに自尊自大の気味があり、他国の批判を招くかもしれないが、三者（王朝名、外国からの呼び名、中国・中華）それぞれに欠点があるなかでは、やはり吾人の口頭の習慣に従って『中国史』と呼ぶことを選びたい。民族が各々その国を尊ぶのは通義であり、これもわが同胞の精神を喚起するひとつの道であろう。

（『飲氷室合集』（巻六）、原文は『清議報』に1901年に発表された。訳は岸本美緒による。

岸本美緒「序章 『中国』とは何か」(尾形勇・岸本美緒編『中国史』<新版 世界各国史3>、山川出版社、1998年、16頁)

この「中国」としての新たなアイデンティティ形成、歴史の形成について、日本はそれを必ずしも正面から受け入れたわけではなかっただろう。中国は自力で自らを救えないといった論調や、中国は必ず分裂するといった論調は、「中国」としてのアイデンティティ形成への動きに対するリアクションであったし、また中国を「中国」と呼ぶことを拒否し「支那」を選択したということも、こうしたコンテキストで説明できるであろう(拙稿「『支那』『支那国』『支那共和国』—日本外務省の対中呼称政策」『中国研究月報』571号、1995年9月)。それらは、単に鏡と鏡で互いに反射し、映し出すだけでなく、直接的な影響も多々見られた。たとえば、劉建輝が「日本でつくられた中国の自画像」(『中国』21』22号、2005年6月)が指摘するように、中国における「中国」としての自画像の形成に、日本の中国論が深く関わったことが知られている(南北中国を分ける議論など)。こうした意味で、アイデンティティは相互に反射しあい、また影響しあって形成されてきている。これらはそれじたいが越境性を持つ物流、犯罪とも、また一定の文化的背景をもちつつも普遍的概念として取り扱われがちな人権とも異なる性質をもつ。すなわち、アイデンティティや下で述べるアジア主義は、それじたいが国や政治主体に収斂していくような非越境性をもちつつも、逆に日本と中国がそれぞれ相互を意識しながら、包摂、排除、そして帝國的論理の中では乱反射するような傾向が見られることにもなるであろう。

3. アイデンティティの越境とアジア主義(1)李大釗と孫文

このような東アジアにおけるアイデンティティの相互連鎖において、アジア主義はいかに位置づけられるべきであろうか。アジア主義それじたいの定義については、竹内好の「アジア諸国の連帯(侵略を手段とするか否とを問わず)の指向を内包している点だけには共通性」/「ある実質内容をそなえた客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性とでもいうべきもの」から昨今の宮台真司による「アメリカ人勝ちのグローバル化に抗すべく、弱者連合の思想である亜細亜主義の本義が活かされる時が来た」という説明までさまざまなものがある(『朝日新聞 夕刊』2003年8月18日)。研究史的整理も多く、初瀬龍平「『アジア主義・アジア観』ノート」(『北九州大学 法政論集』5-1、1977年7月)は現在でもきわめて有益なものである。また初瀬によるアジア主義の概念規定は現在でも説得力がある。それは、アジア主義については「欧米列強のアジア侵略に抵抗するために、日本を盟主としてアジア諸民族は団結せよ」という主張であり、それは「純粋なアジア連帯主義と、アジア侵略のイデオロギーである大アジア主義」に二分できる、というものである。だが、この報告では、アジア主義の定義やその研究史を整理することじたいを目的とするわけではないので、ここでは長くは述べず、越境という観点から見たアジア主義に話を絞りたい。

狭間直樹によれば、1880年から1945年までの65年間の(戦前の)アジア主義の歴史は、大きく初期・中期・晩期の三期に分けられるという。「初期は日清間の関係が対等であったものが、中期には列強間の協調の枠をまもりながら日本の優越を軸とするものになり、晩期には二本を頂点として日本の利益だけをめざすものへと変わっていく」と説明されている。初期から中期への移行は1900年、中期から晩期への移行は1928年の山東出兵に求めたい、というのが狭間の見解である(狭間直樹「序章 アジア主義とはなにか」『東亜』410号、2001年8月)。

こうした過程において、アジア主義はどのように越境したのだろうか。もちろん初期の段階にあっても、中国側の協力者を求めることはあったし、アジア主義を標榜する団体に中国人などを含む

ようなことはあった。だが、中国内部においてアジア主義それじたいが議論されることは決して多くなかったであろう。そして、広く知られているように、1919年には日本の唱える大アジア主義に対する**李大釗の批判**が登場する。それによれば、大アジア主義は「中国併呑主義」であり、また「大日本主義」の変名だとし、結局日本の目指すものはアジアを日本人のものにすることであって、「侵略の主義」であり、「弱小民族を併呑する帝国主義」であり、そして「アジアの民主主義ではなく、日本の軍国主義である」と述べたのであった。また、そこで述べられる「新アジア主義」については、以下のように説明した。ここでは、アジアの民族主義自決論が強調され、日本の指導性が排除される。

およそアジアの民族は、他人に併呑されたものはすべて解放し、民族自決主義を実行しなければならない。しかるのちに一大連合を結成し、欧米の連合と鼎立し、共同して世界連邦を完成し、人類の幸福を増進するのだ。

(李大釗「大亜細亜主義と新亜細亜主義」、『国民雑誌』一卷二号、1919年、人民出版社編『李大釗全集』人民出版社、1959年、127頁、日本語訳については小島晋治・伊東昭雄・光岡玄『中国人の日本観一〇〇年史』自由国民社、1974年)

このような考え方の背景には日本の突出した対中侵略と、ウィルソン主義などの思潮があることは言うまでもない。近代日本思想史的には、なぜ当初はアジアとの連帯を想定した日本のアジア主義が結局侵略に思想史的に転化、また機能的に利用されたのか、という命題が成り立とう。ここではそこは論じずに話を先に進めることにする。

この李大釗の議論について、中国におけるアジア主義への反応として注視すべきはやはり**孫文の言論**であろう。

⇒ 【史料1】孫文の民族主義論(1924年3月2日)

【史料2】孫文の大アジア主義講演(1924年11月28日、於神戸)

孫文のそれは初瀬龍平が指摘するように、李大釗の主張とのあいだに、「日本の『王道』の可能性について無視できない差異がある」と思われるが(初瀬龍平『『アジア主義・アジア観』ノート』『北九州大学 法政論集』5-1、1977年7月)、同時にまた中国自身の過去、現在、将来についても、両者には違いがあるものと思われる。孫文の場合、清代までの周辺諸国との関係を高く評価し、中国自身が強盛である状態のほうが、現在の列強が強盛であるよりもよい、という判断を下す。その根拠としては、「濟弱扶傾」という中国の伝統、あるいは王道といった文化的な要因が挙げられるのである。王道による感化、そうしたものを孫文は主張したのである。これは、かつて西洋と対峙するなかで朝貢国を喪失していった過程を、逆に西洋を批判する論理に用いるということでもあった。他方で、日本発のアジア主義を中国に内在化させて捉え、それを東洋なり、東アジアに普遍化し、さらに日本に投げかけたものだとも言える。

また、孫文のアジア主義の淵源は藤井昇三が検討してきたように、辛亥革命以前にまでさかのぼり、それが『中国存亡問題』(1917年刊行)などを経て、明確になってきたものと考えられる(藤井昇三「孫文の民族主義再論—アジア主義を中心に」、『歴史評論』549号、1996年1月)。だが、周知のとおり、この「大アジア主義」をめぐるのは数多くの論争がある。特に、新聞報道では欠落していたが実際にはあった以下の一節をめぐるものである。これの有無によって、この講演の趣旨は日中提携論なのか、それとも日本批判なのかということに分かれてしまうことにもなりかねない、

といわれてきた。

あなたがた日本民族は、既に欧米の覇道文化を手に入れているうえに、またアジアの王道文化の本質をもっておりますが、今より以後、世界文化の前途に対して、西方覇道の手先となるか、それとも東方王道の干城となるか、それは日本国民が慎重にお選びになればよいことであります。

(この欠落の発見者は安井三吉「孫文の最後の訪日について」、『中国研究』1975年9月号)

この孫文のアジア主義について、それがいったいどのような性格をもっていたかということ、評価することは、高綱博文が指摘するように困難なものである(高綱博文「孫文の『大アジア主義』講演をめぐって—『孫文講演「大アジア主義」資料集』を中心に」、『歴史評論』494号、1991年6月。これへの反論として、安井三吉「孫文・講演『大アジア主義』の研究を深めるために—高綱博文氏の批判に寄せて」、『歴史評論』498号、1991年10月)。だが、すくなくとも、この孫文の「大アジア主義講演」は「アジア主義」は、中国側で日本のアジア主義をめぐる議論を受け止め、それを中国的な根拠を与えて、日本側に投げ返したものの、だとも位置づけられないだろうか。そこにおいて、「王道」があらたな可能性として提起されたということである。だが、この点は以下の二つの新たな「乱反射」とでも言うべき状況をつくりだしたと考えてよからう。

※<補足説明>森悦子「孫文と朝鮮問題」(『孫文研究会会報』13号、1991年12月)を用いながら説明しているように、孫文のこの大アジア主義の講演は、当時の朝鮮半島を代表するメディアである『東亜日報』における議論を惹起した。詳細は森論文に詳しいが、『東亜日報』では日本を含めないアジア連帯を想定している点などが特徴として挙げられよう。

4. アイデンティティの越境とアジア主義(2) 中国におけるアジア主義

その乱反射の第一は、高綱が指摘するように、「孫文の『大アジア主義』講演は日本帝国主義がワシントン体制に挑戦するときに利用されるような本質的契機を内包するものであった」ということだろう(高綱博文「孫文の『大アジア主義』講演をめぐって—『孫文講演「大アジア主義」資料集』を中心に」。孫文の議論は、その「東洋的共同体観は十分に大アジア主義を媒介として大東亜大同主義、更に日本の唱導する大東亜共栄圏へ発展する原理をもつ」、「十億のアジア民族は自らこの日本の指導力の後へ追随するばかりでなく、進んでこの大アジア主義の防衛のために敢へて戦ふであらう。これが既に述べて来た孫中山の大亞洲主義、東亜聯盟論の自らなる帰結ではあるまいか」などと置き換えられた(平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』河出書房、1945年6月、117頁・132頁)。確かに、平野のこのような読みには飛躍がある。平野の孫文理解が誤っているという竹内好の平野義太郎批判、また藤井昇三の批判がある。竹内は「これは実際の孫文とまったく逆の孫文である」とし(竹内好「解説 アジア主義の展望」、竹内好編『アジア主義』<現代日本思想体系>筑摩書房、1963年、15-18頁)、藤井は「極端な歪曲に基づく謬論」としている(藤井昇三「孫文の『大アジア講演』と日本」、『海外事情』26-8号、1978年8月)。だが、(その理解は別にして)孫文の言論が日本のアジア主義に影響を与え、それが時代状況とあいまって、孫文の議論を根拠とした「大アジア主義」の議論が形成されたことじたいは否定されるものではなからう。この点は、たとえば日露戦争における日本の勝利がアジアの民族運動に影響を与えたという言論が孫文の議論を根拠に形成されたのと同様である(拙稿「『日露戦争と中国』をめぐる議論の変容」、日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』、成文社、2005年、P.260-277)。

乱反射の第二は国内へと向かったものである。この点は、孫文の言論から生じたというよりも、それ以前からあったといってもいいのだが、清代以前の中国と周辺諸国の関係を高く評価する中で、中国の指導性や中国を他のアジア諸国よりも優位に置く傾向が強まったのである。清代における対外関係など歴史的な周辺諸国との関係を高く評価する傾向は、1923年の王正廷の議論にも見られる(王正廷「王道と霸道」、『東京朝日新聞』1923年12月25日-28日)。王の議論と孫文の大アジア主義講演が似ていることはすでに横田豊により指摘されているところであるが、王は中国が次第に周辺を教化、感化していき、その領域を広げてきたことや、王道では弱者を大切にするという孫文とも共通する論点を出している。「中国は文化の力で領域を拡大してきた」という文化力を強調するのが王の議論の特徴である(横田豊「王正廷のもうひとつの『大アジア主義』」、『歴史評論』521号、1993年9月)。

もちろん、孫文の言論の意図が中国の優位性や指導性を求めるものであったのかは別の話である。この点は、堀川哲男が述べるように、「少数民族に対する軽視と即座に決め付けてはいけない。このような、中国人が往々にしてとってしまいがちな、何とも説明のつかない考え方のパターンが孫文にもあった」ということなのだろう(堀川哲男『人類の知的遺産 63』講談社、1983年、241-242頁)。

だが、そうした周辺民族と中国との関係をめぐる言論は、「何とも説明のつかない考え方のパターン」として同時代的に放置されていたわけではないものと思われる。すなわち、この点はすでにデリケートな問題として意識され始めていたのではないかと、ということである。この点は、たとえば1918年に上海の『救国日報』において発生した**曾琦と馬鶴天の間の確執**にも見られるように、中国におけるアジア主義／大アジア主義の言論は、いわば日本における大アジア主義(日本の優位性を強調する点において、もはや「アジア主義」ではないと否定されがちな…)の性格を逆に反映して、中国でも中国を中心とする大アジア主義的な言論が形成され始めていた。

⇒【史料3】『救国日報』における馬鶴天と曾琦の確執(1918年)

それは、馬鶴天の言葉を借りれば、「中国は努力奮闘して東アジア第一の強国になり、その暁には朝鮮、安南、シャム、ビルマなどを回復するだけでなく、それらを中国の領土とするというのである。そして、日本も南洋も、かつては中国の世封を受けたのだから、みな中国の属地だと述べたのであった」とのことであった。馬は、「わたしは、この原稿を見て違和感があり、それを印刷する前に遠慮することなく、彼の原稿にある『大アジア主義』を『新アジア主義』に差し替え、本文に就いても修正をくわえた。修正した結果、中国が強盛になった後、朝鮮、安南、インドの独立を援助し、各民族が聯合し、強権国家に反抗すべきだという趣旨になった。また、文章を付け加えた部分もあった。たとえば、およそ「大…主義」というの、強権者が弱小民族を侵略しようと欲するときや、世界を統一しようと欲するときに用いる口実に過ぎないといったことである」と批判している(馬鶴天「關於『大亜細亜』与『新亜細亜』題名の迴憶」、『新亜細亜』第一刊第一期、1930年10月、139-140頁)。

いずれにせよ、近代日本がアジア主義的な言論を欲したように、近代中国にもまたアジア主義的な言論が見られた。それは、民族解放の論理、西洋への抵抗などの点で日本との共通性をはらみつつも、そのイニシアティブの相違(日本か中国か)、あるいはその歴史的な淵源として清代以前を想定するかどうか、その担い手として誰が妥当か、という点において相違があった、とか考

えて良いだろう。

※＜補足説明＞この馬鶴天の説明を曾琦側の史料で裏付けることはいまのところできていない。沈雲龍輯『曾慕韓（琦）先生日記選』（沈雲龍主編〈近代中国史料叢刊〉第二輯、文海出版社、1971年）においても、1918年8月17日に上海の救国日報社の馬鶴天を訪ねていることや、また当初『中国之青年與共和之前途』と題して記していた文章を、徳富蘇峰らの影響を受けつつ、『国体與青年』という題名に改めたことなどは把握できるが、馬との確執までは1918年の日記では確認できない。陳正茂等編『曾琦先生文集』（上中下、中央研究院近代史研究所、1993年）は、巻頭に『国体與青年』を掲載しているが、解説文などを見ても、馬とのやりとりは記されていない。

5. 中国における公的な「大アジア主義」—『新亜細亞』、『新東方』—

こののち、1920年代にはいっても曾は同様の議論を続けたようである。1925年の講演記録「中華民族之使命與中国青年之責任—答上海孫文主義学会」（慕韓先生遺著編輯委員会『曾慕韓先生遺著』中国青年党中央執行委員会、1954年）においても、中国はかつて漢唐の時代に周辺を征服し、「清代中葉になってもそれらの国々は藩属であったが、中国は彼らの土地を占拠したり、人民を奴隷化したり、その生計を奪ったり、その種族を滅亡させようなどとは考えなかった」として、文化を重視し、武力を用いない「大中華民族」の優越したところだとした（27—28頁）。また、そのような平和を求め、共和を實踐している中国民族は、周辺の各国と連携し、「**亞洲大共和国**」を建国して、「その和平をともに享受し、永遠に強権国家の圧制の横行を許さず、専制帝国が進化を妨げるのを受け入れてはならない」としたのである（29頁）。

このような議論は一定の底流となってその後も引き継がれていくと考えられるが、公的には妥当とはされなかったようである。**三民主義の公定イデオロギー化の過程**において、大アジア主義講演の解釈についても、公式化がはかられることになったからである。そこでは、孫文の大アジア主義講演におけるグルカとの関係や、清代以前の周辺との関係の意義については、ある意義付けが与えられていくことになる。このような公的な解釈を加えたのは、国内における公的な三民主義の形成という問題もあるが、あわせて**日本の大アジア主義と何が異なるのか**ということを明確にする必要があったためであろう（藤井昇三「孫文の『大アジア主義』講演と日本」）。

このような孫文の大アジア主義講演の再定位／解釈の一元化については、胡漢民の役割が重要となろう。この点、藤井昇三「孫文の『大アジア主義講演』と日本」や伊東昭雄「『大アジア主義』と『三民主義』」が検討を加えている。伊東は『三民主義月刊』（1933—36年）における胡漢民の言論を分析している。胡は、孫文の大アジア主義を「大アジア主義と国際技術合作」、「ふたたび大アジア主義を論ず」などを発表している。ここでも大アジア主義が孫文の三民主義の民族主義の一部分として論じられている。藤井もまた胡漢民の「大アジア主義について」（王養冲編『胡漢民先生政論選輯 遠東問題与大亜細亞主義』広州民智書局、1935年）を分析し、胡が日本のアジア主義を「**大大和民族主義にすぎない**」と批判していること、また孫文の大アジア主義の實踐者は、日本帝国主義でも南京国民政府でもないことを力説している、としている。

だが、伊東や藤井が取り上げた文章よりも前、すなわち満洲事変以前においても、すでにそうした孫文の大アジア主義の解釈の動きは見られ始めていた。その一つの事例が『**新亜細亞**』という雑誌に見られる。この雑誌は、張振之を中心とし、1930年に南京の新亜細亞社から出版されているが、于右任が題字を記し、胡漢民、戴季陶、そして中国西北部の著作で著名な馬鶴天らが主要な執筆者となっているなど、国民党のあるグループが参加したものとなっている。この雑誌は、「三

民主主義の「亜細亜」を目標として掲げ、日本的な「大アジア主義」を批判しようとするものとなっている。また、これは既に久保純太郎が指摘しているように、張振之や戴季陶らの中心人物たちは、他方で新亜細亜学会を1931年5月に南京で成立させており、この雑誌をその機関誌にしようとしていたと考えられる(久保純太郎「雑誌『新亜細亜』論説記事目録」(『神戸大学史学年報』17号、2002年)。そして、この雑誌の掲載内容を以下の三つに分類している。その第一は三民主義の理論、第二は中国の辺境問題、第三はアジア民族の解放問題である。それは以下のように説明される。

三民主義を原則としてアジア民族の解放問題を研究すること。中国は自ら独立を求めることのほかに、一切のアジア民族が解放を求める運動を支援し、ともに自由平等の地位を獲得していく。(「本刊征稿内容」、『新亜細亜』第一刊第一期、1930年10月、頁なし)

そして、インド、フィリピン、安南、朝鮮、台湾／琉球、南洋、トルコの各国・地域別に、それぞれの歴史、地理、政治、そしてそれぞれが列強により統治されている状態、侵略された経緯、抵抗運動の状況、そして独立後の将来などといったことが個別に挙げられていた。そして、「亜細亜之将来一創刊宣言」では、「総理は中国の救星であり、同時にまたアジア民族の救星でもある。総理の誕生以後、中国に生命が吹き込まれたように、アジアの民族も次第に覚醒し、世界の風雲も新たな色合いを見せ始めたのである」とする(「亜細亜之将来一創刊宣言一」、『新亜細亜』第一刊第一期、1930年10月、9頁)。さらに、先の大アジア主義講演に就いては以下のように位置づけている。

⇒ 【史料4】『新亜細亜』における「大アジア主義」の公定化(1930年)

ここでは、冊封も朝貢も、あるいは独立したあとのアジア諸国と中国の関係に就いて特に述べていない。この点に就いて馬鶴天は「關於『大亜細亜』与『新亜細亜』題名的廻憶」と題された文章で先に挙げたような重要な議論を展開している(【史料3】『救国日報』における馬鶴天と曾琦の確執(1918年))。これは、中国における大アジア主義において二つの流れがあることをいみじくも示している。一つは列強への抵抗と独立運動支援である。これは、対等な連帯という側面が後者よりは強い。いまひとつは、周辺地域をかつて属国であったとし、その状態を回復し、ひいては領土化、少なくとも勢力圏にしようとするものである。ただ、前者においても、アジア諸国に中国の自立運動を支援してほしいと要請するという議論は確認できず、この点、後者と同様の方向性も感じられる。馬鶴天は、曾琦の主張に就いて、その大アジア主義なるものは国家主義に他ならない、と批判した上で、次のように述べる。

⇒ 【史料5】孫文の「大アジア主義」に対する誤解の忌避

馬鶴天は、周辺諸国を中国領として位置づけていくようなアジア主義を否定的に捉え、それは三民主義に反しているという。1930年代の中国における公式なアジア論では、1920年代の孫文の大アジア主義講演に見られるような、冊封・朝貢の論理を列強への対抗手段として位置づけ、そこから冊封・朝貢を肯定的に捉えていくことは決して多く見られるわけではない。こうした意味で、大アジア主義講演も、三民主義の整備の過程である種の意味が与えられたということになる。

こうした傾向は、『新亜細亜』だけでなく、『新東方』という同じく1930年に刊行された雑誌にも見

られる。その創刊号は、孫文の「大亜細亜主義」を巻頭に掲げ、次に配された「本刊使命」という記事でも、「現在の東方民族は、日本を除いて、ひとつとして圧迫され、自らを削ぎ落とされている状況にないものはいない。しかし、情勢の変化に鑑みれば、東方民族は遅かれ早かれ変わることになるだろう。何はどうか、新たな東方というものが産まれることになるのだ。その未来の東方は、必ず、解放された、そして世界の各民族と平等に並び立つものとなることになるのだ」としている。

日本のアジア主義を批判し、そして孫文による中国の優越性を主張すると「勘違い」される可能性のあるものを修正し、それを三民主義の民族主義に位置づけようとする試みは、1930年前後から始まっていたと考えて良いだろう。

＜補足説明＞こうした三民主義の下に大アジア主義を位置づける試みは、当然ながら日本批判でもあったのだが、たとえば1936年2月21日に胡漢民が松井石根と会見して、胡からその大アジア主義について説明しても、「尚我等の大亜細亜主義に就いては彼等孫文時代より彼等自らの大亜細亜主義ありとて之を説明するに、大体我等の意見に違はず」とされてしまっていた。(田中正明編『松井石根大将の陣中日誌』(芙蓉書房、1985年、227頁)

6. 中国における「大アジア主義」のイデオロギー性

日本が自らを中心とする世界を想定し、その際に文明国、軍事力などさまざまな資源を以て、その優位性を説明し、それをアジア主義に流し込んだのと同様、中国における大アジア主義についても、中国自身の持つ歴史的なリソースを動員した議論がないわけではなかった。これは前節でふれたように、確かに危険視され、三民主義の民族問題に位置づけられる中で「浄化」されたはずであったが、それでも中国的な意味でのイデオロギー性が完全に払拭されたというわけではない。これは、曾琦のような主張が公的な場から排除されたということでもない、ということ意味する。

⇒ 【史料6】「中華民族の使命」?

これは一見、曾らの見解と同じようであるが、周辺諸民族に対する中華民族の優越性を唱えるものとなっている。

また、教科書などの公的な印刷物を見ても、こうした傾向は見られる。黄東蘭が「清末・民国期地理教科書の空間表象—領土・疆域・国恥」(『中国研究月報』59-3号、2005年3月)において議論しているように、1930年代末の内政部作成の学校教育用の地図などには、あきらかに「**属国**」を中国自身が回復しなければならない領土として描き出すものが見られている。馬の言う「相反する二つの解釈」は、その後も残っていたと見るのが妥当であろう。

⇒ 【地図】参照

このような中国における「大アジア主義」のイデオロギー性は、日本において連帯を重視していた従来の「アジア主義」が日本中心の「大アジア主義」へと変容する中で、決して消え去ることなく残ったものと思われる。他方、こうした状況との直接的連鎖は不明であるが、中国における華夷思想を批判した京都大学的那波利貞による『中華思想』(岩波書店、1936年)が1936年に出版されたことも注目に値する。この書籍は、おそらく日本の学界で最初に中華思想を論じたものである

う。

7. 汪精衛政権における大アジア主義

では、日中戦争後、日本が「帝国」を形成した後、その帝国内ではどのようなアジア主義の乱反射があったのであろうか。ここでは、三民主義を標榜し、孫文の大アジア主義を継承する立場にあった汪精衛政権を取り上げてみたい。汪政権における大アジア主義については、伊藤昭雄の『大アジア主義』と『三民主義』—汪精衛傀儡政権下の諸問題について—があるが、その研究が明らかにしているように、汪政権は「和平反共建国」をスローガンに掲げ、他方で国民党だけでなく、東亜聯盟中国総会を基点としてこの和平建国とともに、その理論的な拠り所としての大アジア主義を鼓吹した。ここで大きな役割を果たしたのは周化人である。その周は『大亜洲主義綱要』（大亜洲主義月刊社、1940年）、『大亜洲主義論』（第二版、大亜洲主義月報社、1941年）などを著し、汪政権におけるアジア主義のイデオログとなっていた。この周の議論は、孫文の大アジア主義を日本の東亜新秩序に結びつけることにあった。そこでは、欧州での大戦に乗じて日中が提携していくことが提唱されている。この点、第二次近衛声明に応じたものだとも考えられる。

汪精衛自身も、「民族主義與大亜洲主義」（『大亜洲主義月刊』第一四号、1940年11月15日）において、19世紀には日本も中国もともに西方に侵略される危機にあり、その後日本のほうが早く自由、平等を達成したものの、何時また侵略を被るかはわからないのだから、日中の危機感は同様のものなのであって、そして双方ともに帝国主義に抵抗するという運命をもっている、といった言論をおこなっていた。

おわりに

以上のように、アジア主義は日中の双方において相互に反射しながら、またそれぞれが独自のコンテクストをもちながら展開していたことが確認できた。これが戦後どのようになるのか。まだまだ検討が求められる。だが、台湾の『三民主義』のテキストは以下ようになっており、中華民族の優越的な議論は、ほとんど見られなくなっている。

⇒ 【史料 7】戦後台湾での『三民主義』テキスト

最後に、本報告が議論してきたもう一つの側面を述べて起きたい。これは久保田善丈「“アジア主義者”と雑誌『成功』（1902—16）—“いざない”のなかの中国イメージ」（『東洋学報』84—1、2002年）が議論していたことでもある。すなわち、久保田の言葉を借りれば、

『近代日本のオリエンタリズム』を問う文脈では、例えば中国が一方向的に『まなざし』の対象として語られてきたこと、それによって一定のイメージのなかに閉じ込められてきたことがクローズアップされてきた。そしてこの点については本稿も同様だが、しかし、そこでは『まなざしの主体としての中国』という側面が視野から落ちてしまうし、それによって今度は中国自身の『帝国化』や『オリエンタリズム』の契機が近代において結果的に隠蔽されてしまうことになるのである。しかし、日本がかつて「近代日本」であったように、中国もまた好むと好まざるにかかわらず『近代中国』であったし、そうであれば中国は単に近代の犠牲を蒙るにとどまらないはずなのである

ということである。本報告では、意識して中国からのまなざしを論じることで、そこに日本のまなざ

しがいかに反射しているか、また中国からのまなざしが日本に影響を与える可能性についても見てきた。「近代日本」と「近代中国」の両者の越境性と連鎖性、そして同一性を排他性がそれぞれ見られただろう。

＜補足説明＞なお、このような中国における大アジア主義の外交政策への影響については、たとえば国際連盟理事会の非常任理事枠における「アジア枠」設定問題などが考えられるが、他方で中国はシヤムなどのかつての朝貢国と非対等な関係を求めたわけではない。しかし、カイロ会談はじめ、戦後構想における蒋介石のアジア像については、三民主義との民族主義との関連性がないわけではないように思う。この点は検討課題である。

(拙稿「中国外交における象徴としての国際的地位 (『国際政治』特集・天安門事件後の中国)145号、2006年夏、17-35頁)

史料編

【史料1】孫文の民族主義論(1924年3月2日)

「現在の世界において、英米日仏伊など五つの強国があるに過ぎなかったが、後になってドイツとロシアが勢力を回復して強国の列に加わったが、それでも六七つの大国があるに過ぎない。もし、中国が日本に学ぶことができれば、他の国も加わり、およそ十強国になるであろう。そのとき、中国は第一等の地位を回復することができるだろう。しかし、中国がそのような地位を回復したとき、どのような方法によってその地位が保たれるのであろうか。中国では昔から「弱きを救い、危うきを助ける(「濟弱扶傾」)」という。中国にこのような好き政策があったからこそ、数千年ものあいだ中国が強国であっても、周辺のヴェトナム、ビルマ、朝鮮、シヤムなどの小国はみな独立を保つことができたのである。現在、欧州の勢力が東漸してから、ヴェトナムはフランスに滅ぼされ、ビルマはイギリスに滅ぼされ、朝鮮は日本に滅ぼされた。だからこそ、中国がもし強盛になれば、われわれに中国自身の民族的地位を回復しなければならないだけでなく、世界において大きな責任を負うことになるのである。もし、中国がそのような責任を負えないのなら、たとえ中国が強盛になったとしても、それは世界にとって大害あるものとなり、大利などないのである。中国は世界に対して、どのような責任を負うのだろうか。現在の世界の列強が歩んでいる路は、人や国家を滅ぼすものである。もし、中国が強盛になったとして、やはり人や国家を滅ぼそうとし、列強の帝国主義を学び、列強と同様の路を歩んでいけば、結局彼らと同じ轍を踏むことになってしまう。だからこそ、われわれはまずひとつの政策を決定しなければならない。それこそ、「弱きを救い、危うきを助ける(「濟弱扶傾」)」ことであり、そうしてこそわれわれは民族の転職をまっとうできるのである。われぞれは弱小民族を助け、世界の列強に抵抗する。もし全国人民がみなこのような志をたててこそ、中国民族は発展し、もしこのような志をたてなければ、中国民族には希望がないであろう。(民族主義第6講、「三民主義」、『孫中山全集』第9巻、中華書店、頁)

【史料2】孫文の大アジア主義講演(1924年11月28日、於神戸)

覇道を用いる文化と王道による文化を比べると、つまるところどちらが正義と人道にかなうであろうか、そしてどちらが民族と国家にとって利があるだろうか。あなたがたも自分で証明してみるとい

いが、わたしはひとつの事例を挙げて説明しよう。五百年前から二千年以上前の時期、その間の一千年以上、中国は世界で最も強い国家であった。その地位は、現在のイギリスやアメリカと同様のものだった。そのイギリスやアメリカは、あくまでも(複数の強国のあつまりである一訳者注)列強の一つだが、中国のかつての強さはぬきんでており、いわば一強であった。中国だけが強かった時期、各弱小民族と各弱小国家はどのような状態であっただろうか。また、各弱小民族と各弱小国家は、中国に対してどのような態度をとっていたらうか。当時の弱小民族と国家は、みな中国を上邦として崇めていた(本文では「拜」が遣われている一訳者注)。そして中国に朝貢し、自らを藩属と位置づけるように求めた。ここでは、中国に対して朝貢することができることを荣誉とし、中国に朝貢に来ることができないことを恥辱とした。当時、中国に朝貢しに来た国には、アジアの国々だけでなく、欧州西洋各国も含まれていた。彼らは遠方から来ることを厭わなかったのである。中国がかつてこれほど多くの国や民族、またそれほどおくの国や民族からの朝貢を受ける際には、どのような方法を用いたのだろうか。果たして、陸海軍の軍事力という覇道を用いたのだろうか、そして彼らに対して朝貢を強制したのだろうか。それは違う。中国は完全に王道によって彼らを「感化」させたのであり、彼らは中国の徳に感じ入り、納得して請願したのであり、また自ら朝貢してきたのである。彼らはひとたび中国の王道の感化を受けると、中国に一度だけ朝貢に来るだけでなく、子々孫々にわたって中国に朝貢しようとしたのであった。このような事実については、最近においてもまだ証拠が見られるものである。

(外務省調査部編『孫文全集』(上、原書房、1967年、P.1134-1135)、中国語の原文は「大亜洲主義」(『国父全集』、中央文物供应社、1957年、P.507-519))

【史料3】『救国日報』における馬鶴天と曾琦の確執(1918年)

民国七年、留日学生救国団は、上海に『救国日報』を創設したとき、私が編集責任者に推され、救国団の同人がそれぞれ記事を担当することになった。そして、現在とても有名になっている国家主義者である曾琦先生がとても長い文章を『救国日報』に書いたことがある。そこでは、まず中国が強盛時には朝鮮、安南などの服属を得ていたことを記し、ついで清末の国権喪失や失地、中国の地位の危険性について述べた。そして最後に大アジア主義を主張していた。その内容は、中国は努力奮闘して東アジア第一の強国になり、その暁には朝鮮、安南、シヤム、ビルマなどを回復するだけでなく、それらを中国の領土とするというのである。そして、日本も南洋も、かつては中国の世封を受けたのだから、みな中国の属地だと述べたのであった。わたしは、この原稿を見て違和感があり、それを印刷する前に遠慮することなく、彼の原稿にある「大アジア主義」を「新アジア主義」に差し替え、本文に就いても修正をくわえた。修正した結果、中国が強盛になった後、朝鮮、安南、インドの独立を援助し、各民族が聯合し、強権国家に反抗すべきだという趣旨になった。また、文章を付け加えた部分もあった。たとえば、およそ「大…主義」というの、強権者が弱小民族を侵略しようと欲するときや、世界を統一しようと欲するときに用いる口実に過ぎないといったことである。翌日、曾先生はこれを見て大いに憤怒し、新聞社に来て、わたしと交渉をおこなった。結果、曾先生は彼の原文を救国団の名義で単行本として出版することになった。わたしは、救国団との思想意見の不一致を理由に、この事件を機に上海を離れて北上した。

馬鶴天「關於『大亜細亞』与『新亜細亞』題名的迴憶」(『新亜細亞』第一刊第一期、1930年10月、139—140頁)

【史料4】『新亜細亞』における「大アジア主義」の公定化(1930年)

総理は常々大アジア主義を提唱していた。だが、この大アジア主義は一つの独立した主義であろうか。そうでない。アジア主義は、決して独立した、単独に存在する主義ではない。総理が大アジア主義という場合、それは三民主義を「民族国際」に方面に適用したものであって、「三民主義は救国主義だ！」という総理の主張になぞらえることもできる。つまり、三民主義の原則を救国方面に適用したのものであるということである。すなわち、三民主義こそが独立した単独の主義であって、大アジア主義は三民主義を運用した上での説明であるに過ぎない。大アジア主義を論じる者は多い。特に東方において既に強盛な地位を築いているある国家は、大アジア主義を標榜してそのアジア統一の迷夢を実現しようとしているし、少なからぬ武人や政客も帝国主義に媚びるべく大アジア主義を鼓吹している。総理は、一般人が邪説を振りまいているからといってこの大アジア主義という言葉の忌避しようというのではない。総理はとて確固たる三民主義の立場に則っている。総理が語っているのは、三民主義的な大アジア主義なのである。(中略)総理は三民主義を発明したが、この三民主義によって中国を救おうとしたからのだから、この三民主義は救国主義だといえる。また、三民主義によってアジア民族を救おうとしたのだから、三民主義は異論なく大アジア主義だといえることができる。中国人は中国復興の観点において、三民主義を信じ、信仰しているが、アジア民族もアジアの有色人種の復興の観点において、三民主義を信じ、信仰するのである。「亜細亞之将来—創刊宣言—」(『新亜細亞』第一刊第一期、1930年10月、12—13頁)

【史料5】孫文の「大アジア主義」に対する誤解の忌避

総理が講演で述べた「大アジア主義」というのは、仁義道德、すなわち王道を基礎とした主張である。各民族を聯合し、アジアの諸民族の地位を回復し、圧迫されている諸民族のために不平等を打破しようとするものである。ここで述べる大アジア主義はすなわち三民主義のことである。曾琦の述べる大アジア主義は、それじたいの有している容量を超えてしまっていて、三民主義に反している。それに対して鶴天の改めた新アジア主義は総理の三民主義に適っている。そして、それは謀らずも、現在の新亜細亞社の同人たちの考え方にそうものだったのである。この簡単な経緯からもわかるように、「大アジア主義」には実は二つの相反する解釈があるのだ。この雑誌が、総理の三民主義に依拠し、『新亜細亞』と名づけたのは、これらの三民主義に反する人々の曲解を防ぎ、一般人の誤解から免れることができるものなのである。(馬鶴天「關於『大亜細亞』与『新亜細亞』題名的迴憶」、『新亜細亞』第一刊第一期、1930年10月、139—140頁)

【史料6】「中華民族の使命」?

(前略)では誰がアジアの圧迫されている民族を連合するという重大な使命を担うことになるのだろうか。原則面から述べれば、それはアジアの圧迫されている各民族がそれぞれその使命を担う権利がある。この点は議論を待たないだろう。しかし、白色帝国主義が跋扈する現在、またそこに赤色帝国主義が加わっている現在、アジアの民族運動の勝算を保障するためには、注意しなければならない。われわれの見るところでは、アジアの民族において、この重大責任を負えるのは、おそらくわれわれ中華民族だけだろう。この発言は決して幻想などではなく、事実的な根拠もある。第一に、中華民族には多くの人口があり、これによって白人に対抗できる。第二に、中華民国は十分に優越的な民族である。民族道德、民族思想、民族能力においてそれが見られる。第三に、中華民族は三民主義の指導の下に、決して帝国主義の後塵をはいするようなことはなく、他の民

族を辱めることもない。中華民族自身について言えば、国内の民族の平等と自由をはかるべく、重大な責任を負っているし、中華民族自身の存亡のために、重大な責任を負っている。全世界の多数の人類の幸福を計るならば、まさに重大な責任を負わねばならないのである。

印維廉「亜細亜民族運動之進展」(『新亜細亜』第一刊第一期、1930年10月、97頁)

【史料7】戦後台湾での『三民主義』テキスト

世界各民族一律平等

(一)世界各民族の一律平等ということの意味 国父はおっしゃった。「民族主義とは、世界人類の各民族がそれぞれ平等で、一民族が決して他民族によって圧制されるようなことがあってはならない、というものである。」だからこそ、世界の各民族は一律平等であり、すなわち世界上のいかなる民族も他民族の支配や圧迫は受けず、それぞれがみな平等の地位と同等の生存の権利を有するということなのである。この点について、先の総統である 蔣公が詳細に解説した。「われわれの民族主義というのは、中華民族が強大になることをただ貪り求めるのではなく、またほかの強大の民族と同様に一切の弱小民族に圧制を加えたりしない。これは帝国主義であり、民族主義ではないからだ。各位ははっきりと知らねばならない。民族主義というのは、中国民族の独立と平等を求めるものであり、ここから、一切の弱小民族が独立し平等な地位を獲得することを助けるということになるのだ。(後略)

(二)「弱きを救い、危うきを助ける(「濟弱扶傾」)」(前略)中国がもし強盛になれば、われわれに中国自身の民族的地位を回復しなければならないだけでなく、世界において大きな責任を負うことになるのである。もし、中国がそのような責任を負えないのなら、たとえ中国が強盛になったとしても、それは世界にとって大害あるものとなり、大利などないのである。中国は世界に対して、どのような責任を負うのだろうか。現在の世界の列強が歩んでいる路は、人や国家を滅ぼすものである。もし、中国が強盛になったとして、やはり人や国家を滅ぼそうとし、列強の帝国主義を学び、列強と同様の路を歩んでいけば、結局彼らと同じ轍を踏むことになってしまう。だからこそ、われわれはまずひとつの政策を決定しなければならない。それこそ、「弱きを救い、危うきを助ける(「濟弱扶傾」)」ことであり、そうしてこそわれわれは民族の転職をまっとうできるのである。われぞれは弱小民族を助け、世界の列強に抵抗する。

★このあと、「弱きを救い、危うきを助ける(「濟弱扶傾」)」の具体例として、第二次大戦中に蒋介石が英米にインドの独立をもとめたこと、カイロ会談で朝鮮の独立をもとめてルーズベルトの賛意を得たこと、ヴェトナムについても中米両国で戦後の独立を支援しようと提案したこと、タイについては日本と同盟していたにもかかわらず、それを日本に脅迫されていたものと看做して、その国際復帰を助けたこと、日本に対しては「以德報恩」の精神でのぞんだこと、などが挙げられている。

(国立編訳館主編『三民主義課本』幼獅文化事業公司、正中書局、1986年初版、84-87頁)

////////////////////////////////////
主要参考文献・史料など
////////////////////////////////////

『三民主義月刊』(1933-36年)、『新亜細亜』、『新東方』、『大亜洲主義月刊』

广东省社会科学院历史研究室・中国社会科学院近代史研究所中华民国史研究室・中山大学历

- 史系孙中山研究室合編『孙中山全集』(中華書局、1981—1986年)
- 中央党史史料編纂委員会『国父全集』(中央文物供应社、1957年)
- 外務省調査部編『孫文全集』(上、原書房、1967年)
- 王正廷「王道と霸道」(『東京朝日新聞』1923年12月25日—28日、なお掲載初日は「日支親善の障碍」であったが、二日目から「王道と霸道」に題名が変更されている。なお、『大阪毎日新聞』にもほぼ同一内容のものが掲載されている。こちらは12月25—27日掲載)
- 汪精衛自身も、「民族主義與大亞洲主義」(『大亞洲主義月刊』第一卷四号、1940年11月15日)
- 王養冲編『胡漢民先生政論選輯 遠東問題与大亞細亞主義』(広州民智書局、1935年)
- 周化人『大亞洲主義綱要』(大亞洲主義月刊社、1940年)
- 周化人『大亞洲主義論』(第二版、大亞洲主義月報社、1941年)
- 沈雲龍輯『曾慕韓(琦)先生日記選』(沈雲龍主編〈近代中国史料叢刊〉第二輯、文海出版社、1971年)
- 曾琦「中華民族之使命與中国青年之責任—答上海孫文主義学会」(慕韓先生遺著編輯委員会『曾慕韓先生遺著』中国青年党中央執行委員会、1954年)
- 田中正明編『松井石根大将の陣中日誌』(芙蓉書房、1985年)
- 陳正茂等編『曾琦先生文集』(上中下、中央研究院近代史研究所、1993年)
- 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』(河出書房、1945年6月)
- 馬鶴天「關於『大亞細亞』与『新亞細亞』題名的迴憶」(『新亞細亞』第一刊第一期、1930年10月、139—140頁)
- 李大釗「大亞細亞主義与新亞細亞主義」(『国民雜誌』一卷二号、1919年)、人民出版社編『李大釗全集』人民出版社、1959年、127頁。日本語訳については小島晋治・伊東昭雄・光岡玄『中国人の日本観—〇〇年史』自由国民社、1974年)
-
- 伊東昭雄「『大アジア主義』と『三民主義』—汪精衛傀儡政權下の諸問題について—」(『横浜市立大学論叢 人文科学系列』40—1、1989年3月)
- 川島真「『支那』『支那国』『支那共和国』—日本外務省の対中呼称政策」(『中国研究月報』571号、1995年9月)
- 川島真「『日露戦争と中国』をめぐる議論の変容」(日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』、成文社、2005年、P.260-277)
- 川島真「関係緊密化と対立の原型—日清戦争後から二十一カ条要求まで」(劉傑・三谷博・楊大慶編著『国境を越える歴史認識』東京大学出版会、2006年所収、28—50頁)
- 川島真「歴史対話と史料研究」(劉傑・三谷博・楊大慶編著『国境を越える歴史認識』東京大学出版会、2006年所収、347—366頁)
- 岸本美緒「序章 『中国』とは何か」(尾形勇・岸本美緒編『中国史』〈新版 世界各国史3〉、山川出版社、1998年)
- 久保純太郎「雑誌『新亞細亞』論説記事目録」(『神戸大学史学年報』17号、2002年)
- 久保田善文「“アジア主義者”と雑誌『成功』(1902—16)—“いざない”のなかの中国イメージ」(『東洋学報』84—1、2002年)
- 黄東蘭が「清末・民国期地理教科書の空間表象—領土・疆域・国恥」(『中国研究月報』59—3号、2005年3月)

- 高綱博文「孫文の『大アジア主義』講演をめぐって—『孫文講演「大アジア主義」資料集』を中心に」、『歴史評論』494号、1991年6月)
- 竹内好「解説 アジア主義の展望」、竹内好編『アジア主義』〈現代日本思想体系〉筑摩書房、1963年
- 陳徳仁・安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集：1924年11月日本と中国の岐路』(法律文化社、1989年)
- 那波利貞『中華思想』(岩波書店、1936年)
- 狭間直樹「序章 アジア主義とはなにか」(『東亜』410号、2001年8月)
- 初瀬龍平「『アジア主義・アジア観』ノート」(『北九州大学 法政論集』5-1、1977年7月)
- 藤井昇三「孫文の『大アジア講演』と日本」(『海外事情』26-8号、1978年8月)
- 藤井昇三「孫文の民族主義再論—アジア主義を中心に」、『歴史評論』549号、1996年1月)
- 堀川哲男『人類の知的遺産 63』講談社、1983年、241-242頁)
- 茂木敏夫「華夷秩序の近代的再編—再定義された『伝統』とその行方」(2006年度国際政治学会・部会5「19世紀東アジア地域秩序の再編」、2006年10月15日、報告ペーパー)
- 森悦子「孫文と朝鮮問題」(『孫文研究会会報』13号、1991年12月)
- 安井三吉「孫文の最後の訪日について」(『中国研究』1975年9月号)
- 安井三吉「孫文・講演『大アジア主義』の研究を深めるために—高綱博文氏の批判に寄せて」、『歴史評論』498号、1991年10月)
- 横田豊「王正廷のもうひとつの『大アジア主義』」、『歴史評論』521号、1993年9月)
- 劉建輝「日本でつくられた中国の自画像」(『中国 21』22号、2005年6月)